



東北コットンのタオル・ストールを
JALショッピングで好評発売中



東北コットン2%の糸を使用したタオル製品4アイテム各3色、ストール製品2アイテム各3色をJALショッピングでもお買い求めいただけます。

www.shop.jal.co.jp/cotton/

JALグループは東北コットンプロジェクトに賛同し、社員がボランティアで農作業などのお手伝いをしてきました。今回、手がけたのは収穫祭の屋台でのカレーづくり。肉やジャガイモ、タマネギなど材料をそろえ、約200人分を調理しました。寒空の中、たくさんの方にJALスタッフお手製のカレーを楽しんでいただきました。



写真 / 中野幸英



2012.
11.17

生産者の一人、貴田勝彦さんは「もっともっと皆さんに綿摘みを楽しんでほしいというのが私の思い。たくさんの方に来ていただけてうれしいと同時に、一度に全部の綿が開く状態にならなかったのも、ちょっと申し訳ない気持ちです」。しかしボランティアの皆さんはそんな細かい心づかいを吹き飛ばすように綿摘みを楽しんでいました。そして、収穫作業の終わった後は収穫祭。プロジェクト参加企業らが手がける屋台では、焼きそば、うどん、豚汁、カレー、パンケーキなどがふるまわれました。さらに会場では中学生たちの合唱や、スコップ三味線の演奏、女子プロレスの公演など、数々のイベントが続き、和やかな収穫の一日となりました。



“笑顔も弾ける、コットンの秋。”
～収穫のときを迎えた、東北コットンプロジェクト～

- 種まき
- 販売
- 製品化
- 紡績工場
- 収穫祭
- 綿摘み開始
- 花見の会 & 草取り
- 草取り
- 間引き
- 種まき

2011年に始まった東北コットンプロジェクトは、綿の栽培、紡績、商品化、販売を参加各社が共同で展開し、農業を通じて東日本大震災の復興をめざす計画です。被災地の農業生産組合・農業法人やアパレル関連企業の有志が集結し、種まきから草取り、収穫へと試行錯誤しながら綿を栽培しています。昨年初の収穫を得て製品化も果たし、2012年の春からプロジェクトは2年目の栽培に入りました。

東北コットンプロジェクト



www.tohokucotton.com

名取地区からのメッセージ

荒浜地区と同様、綿の栽培をしている名取地区では2012年10月20日に収穫祭を実施しました。「初めて綿と出会った昨年と違い、今年は私たちの農業生産者としてのノウハウを活用すれば、2、3倍の収穫は可能だと思う一方、オーガニック志向に沿って栽培するには、もっと勉強が必要とも感じま



す」と語るのは、名取地区で綿栽培を手がける耕谷アグリサービス代表取締役の佐藤富志雄さん。「収益を出そうとするよりも、まずは十分な収穫という成果を出すのが先決。綿という作物に失礼のないように作りたい。そして、綿を通じて多くの人との出会いがあったこともまた、大きな収穫と感じています」(佐藤さん)



「東北コットンプロジェクト」で植えられた綿は、ようやく実りの秋を迎えました。2012年11月17日、仙台の荒浜地区の綿畑では大勢のボランティアが参加し、収穫とそれに伴う収穫祭を実施。笑顔の輪が広がりました。



震災復興への思いを胸に

綿の収穫には地元、仙台の南吉成中学校の生徒107名がボランティア参加しました。同中学校はこの他にも地域の各種ボランティア活動に熱心に取り組んでおり、「ボランティア・スピリット賞」も受賞しています。「7月の草取りにも参加しましたが、綿がそのときよりも成長してうれしかった。収穫のとき、手に綿の柔らかさを感じながら、震災復興に私たちが少しでも貢献できる気がしました」(南吉成中学校1年生の伊藤桃香さん)。



この季節、綿畑の色は緑から茶褐色が主体となり、そこに点々と白い綿が見えています。収穫作業の参加者は、関係企業の方々や、全国から集まった一般ボランティアの方々、JOCA(青年海外協力協会)のアジア人研修生、仙台市立南吉成中学校の生徒など、合わせて約300名。生産者の方々に綿の摘み方を教わり、一つひとつ、コットンボールを手で摘んで、袋に入れていきます。

親子で参加した方もいます。熊坂百代さんと娘の心花ちゃん(8才)と奈々世ちゃん(6才)もその一組。「開いた綿を初めて見ました。ふわふわした綿が気持ち良かった」とうれしそうに心花ちゃん。「今後、製品になったとき、あらためて子どもたちが摘んだ綿が形になったことを実感できると思います」とお母さんの百代さんも楽しみの様子です。

南 吉成中学校の生徒を引率した田原 満先生は、「こうしたボランティア活動は、生徒たちの心の教育として貴重です。もちろん教室でもそうした教育はしますが、100回の話より一回の行動が与える力は大きい」と語ります。

栽培面積が増えたこともあり、今年は昨年以上の収穫が見込まれますが、生産者にとってはまだまだという思いもあります。「決して満足とは言えません。夏の雑草や害虫の被害が大きく、収穫量は理想の半分以下でしょう。オーガニック栽培だけに草取りなどは人手に頼るしかなく、十分に手が回らなかったこともあり」(仙台東部地域綿の花生産組合の佐藤善則さん)。

それでも雑草を防ぐマルチを敷いた効果が出るなど、着実に進歩しています。「来年、もうひとつふんばりしてさらに成果を上げたいと思っています」(佐藤さん)。それは生産者全員の気持ちでもあるようです。

綿

は花が咲き終わり、結実すると、種の周囲に綿毛ができます。やがてこれが弾け、白く丸いボール状のコットン(コットンボール)が顔をのぞかせます。こうなればもう収穫のとき。待ちに待ったその収穫の日がいよいよやってきました。